

序文

序文

青春とは何か？時は短く、人生は夢の如し。青春は急ぎ足で通り過ぎる一冊の本のよう、戻ることのできない一筋の道のよう。成長の旅は曲がりくねり、途中の景色は見逃せない。夏が過ぎて秋になり、気温が下がって雁は南に飛ぶ。微風が花弁に恥じらう露を揺らし、桐の葉が次々と落ちる。金色の稲穂が秋風と踊り、深紅の果実が枝で騒ぐ。今、私は十八歳になり、六ヶ月をかけてこの文章を創作し、光輝く青春の一節を綴るため。

序文

『運命の歌』と名付けたのは、時は運命が奏^{かな}でる歌だと信じているから。物語は私の経験^{けんけん}を元にし、年齢も性格も異なる七人の女子学生の学園生活を描いている。彼女たちの間には密接な関係があり、複雑なネットワークを編み出し、少しの変化でも全体に影響する。それぞれ自分の位置を見つけ、役割を果たそうと努力している。絶対の悪役はおらず、現実には許^{がた}し難い悪人^{あくにん}もいなければ、世界を救う神もない、ただの人間だけ。象徴主義を用い、人物や感情を様々な花に例え、風雲^{ふううん}の変化で登場人物の心情^{しんじょう}を生き生きと描く。波乱^{はらん}に満ちた物語、心を引きつける描写、予測できない展開、細部^{さいぶ}も推敲^{すいこう}に堪え、随所に伏線^{ふくせん}と暗示がある。出会った瞬間から、結末は既に決まっているかもしれない。主人公の感情の波及^{はきゅう}と個人の成長を強調し、人間

序文

性の本質を探求する。読了したら、もう一度読んでみては？異なる感慨を生むかもしれません。

二〇二三年秋